魔法少女リリカルなのは　闘神士と魔法少女

柴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　闘神士と魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ０４７３Ｔ

【作者名】
柴

【あらすじ】
海鳴市にある小さな神社。そこを掃除していた”吉川ソラ”はそこで１体の式神と１人の魔法少女に出会い、人生を大きく変える戦いに巻き込まれていく・・・・・初投稿の作品なのでいたらない所があると思いますが、一生懸命書いていきますので、よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

陰陽大戦記のアニメを見ていたら、リリカルなのはとクロスできると思い書いてみました。完結めざして頑張って書いていきたいと思います。

プロローグ

式神界

???「ふぁ～あ、しっかし平和だな～、たいくつすぎて大降神だの超降神だのぶちかましてた毎日が嘘みたいだ。」

???「お前と契約解除してからしばらくたつけど、元気にしてるか。リク？」

???「そっちじゃあもういくつか節季（せっき）が流れちまったんだよな。」

???「ちゃんとボートのってるか？　野菜、食わされてるか？爺さんと仲良くやってるだろうな。」

???「おめぇは辛い事があるとすぐ閉じこもっちまうから　たまには発散しねぇと体によくねぇぞ。」

???「てぇ・・何でこの俺様がこんな心配しなくちゃならねぇんだ。」

???「たく・・平和なのも考えものだぜ、余計なことまで考えちまう。」

???「ぬぁ～あ、やっぱ戦ってねぇとだめだな。」

???の前に障子（しょうじ）が出て来た。

???「来た、これは。」

障子が光る。

???「来た！来たぜ！！誰かが俺様を呼び出そうとしていやがる！！」

???「どうやら新しい戦いが俺を呼んでるみたいだ・・・リク、俺なんかが心配しなくてもお前はきっともう大丈夫なんだろうな。・・・なんてったておめぇは俺様と共に戦いぬいた最高の闘神士なんだから。」

???「じゃあなリク、縁がありゃまた合おうぜ！」

障子がまた光る。

???「よっしゃ！いくぜ！！」

コゲンタ「白虎のコゲンタ様を呼ぶやつは誰だ！！」

第一話　忍び寄る災厄（前書き）

大幅に書き換えました。

第一話　忍び寄る災厄

暗い森の中で民族衣装みたいな服を着た少年が息を荒くして走っていた。
少年はひらけた場所に出るとあたりを警戒しながら見渡す。

すると茂みから少年を見ているものがある。

それは異形の物だった。全身が黒い毛に覆われている獣で頭から触覚び出ている。

???「くっ！！」

少年は赤い宝石みたいなものを、獣に突き出す。すると宝石が輝きだし周囲に薄い緑色で見たことの無い文字と、中心から四角形がうかびあがる。

それを合図に黒い獣が飛び出し少年へと突進する。

???「妙(たえ)なる響き、光となれ！赦されざる者を、封印の輪に！」

黒い塊が跳躍し襲い掛かる。

???「ジュエルシード　封印！」

浮かび上がった陣に黒い塊が突っ込み周囲が光に包み込まる。
陣にぶつかった衝撃か、それ以外の力が加わったのか。獣が苦痛の声を上げ体液のようなものをまきちらしながら逃走する。

？？？「逃がし・・・ちゃった」
膝をつき、顔を苦痛にゆがめる。
？？？「追いかけ・・・なきゃ」
しかし少年はそのまま地面に突っ伏してしまう。
そして視界が白く染まっていく・・・

ソラ「ん・・・夢？」

カーテンから漏れ出す朝日に顔をしかめながら、吉川ソラは目を覚ます。

ソラ「なんだったんだ、今の・・・・・まあいいか。」

ソラは体を起こし敷いてある布団をたたみ押入れのなかに入れた。
襖を開けて隣の部屋に移動する。

ソラ「おはよ、母さん。」

母「おはよう、ソラ。今日は早いじゃないか。」

ソラ「いや、なんか変な夢みてさ～」

母「変な夢？」

ソラ「うん、まぁただの夢だし。それより朝食出来てる？」

母「もう少しで出来るから、ちゃぶ台拭いといて頂戴」

ソラ「了解～」

ソラがちゃぶ台を拭き終わったら、ちょうど朝食が出来上がった。

ソラ・母「「いただきます！」」

母「そうだ、ソラ、明日、学校が終わったらさ、神社の掃除してきて。」

ソラ「えぇ～なんで俺が。」

母「それはあんたに神社の掃除を通じて神様と対話するためさ。」

ソラ「で？・・本心は？」

母「私がめんどくさいから！」

ソラ「はぁ～母さんはあの神社の巫女なんだから掃除さぼっちゃだめだろ。」

母「巫女さんだって掃除をさぼりたくなるのよ」

母「それに、私はこの”メゾン吉川”の経営をがんばってるんだから。」

ソラ「経営って、誰も住んでねぇじゃん。」

母「いいのよ。それに、ゆくゆくはあんたにあの神社を管理してもらおうと考えているんだから、その練習！」

ソラの家はこの町にある“海鳴神社”を管理する天流の闘神士（とうじんし）の一族である。

ソラ「練習・・・はぁ、わかった・・・」

母「それより早く行かないとバスに乗り遅れるよ。」

ソラ「えぇ！？」

壁にかけられた時計はすでに8時をまわっていた。

ソラ「やっべ！・・・・・ごちそうさん！・・・いってきます！」

母「いってらしゃ～い、ちゃんと父さんたちにあいさつしなさいよ。」

ソラ「わかってる！」

ソラは自分の部屋と反対の部屋に入る。そこには仏壇があった。

ソラ「（震（シン）、坎（カン）、兌（ダ）、離（リ）・・・・いってきます父さん。」

二本たてた指を右、上、左、下の順に小さく印を切りながら、仏壇にあいさつしてからソラは家を出てバス停に向かって走っていった。

Ｓａｉｄ　ソラ

走ってバス停に着くと見覚えのある顔の”アリサ・バニングス”と”月村すずか”がいたので俺はあいさつすることにした。

ソラ「おっす。」

アリサ「おはよう、ソラ。」

すずか「おはよう、ソラ君」

二人とあいさつしてるとバスがやってきた。バスに乗り込んでからしばらくすると

???「おはようございま～す」

すずか「なのはちゃん！」

アリサ「なのは～こっちこっち。」

なのは「すずかちゃん、アリサちゃん。」

ソラ「おっす、なのは」

なのは「おはよう、ソラ君」

こいつは”高町なのは”だ。なのははメゾン吉川の近所で経営している”喫茶　翠屋”の娘だ。

ちなみにアリサとすずかは社長令嬢である。

こいつらとは2年からの付き合いだ。いつもいっしょにる、なかよし3人娘である。

学校の下駄箱で上履きにはきかえていると

???「おりゃ！」

後ろから肩を組ませてくる奴がいた

ソラ「タクミ、重いぞ。」

タクミ「おっす！ソラ。いいじゃねかよ、いっしょにいこうぜ！」

こいつは”出雲タクミ”隣町の出雲神社の長男だ。　タクミの家は地流の一族だが俺たちはそんなの関係なしで仲良くしている。

タクミとしゃべりながら教室まで俺たちはそのまま歩いていった。

先生「この前みんなにしらべてもらった通り、この町にもたくさんのお店がありましたね。そこで働く人たちのようすｙ・・・・・」

先生の言うとうりでこの町には店が多い、なのはの所の喫茶店やら母さんがパートで働いているスーパーとかが有るが、なぜかこの町には牛丼とかそうゆう丼物の店が数多く存在している。俺も母さんが帰るのが遅くなった時などよく利用している。

先生「・・・が、みんなは将来どんなお仕事に就きたいですか？」

キン～コン～カン～コン

教室でタクミと弁当をたべていると

タクミ「タクミ、おまえはこの先どんなことしたい？」

ソラ「おれはまだきめてない、おまえは？。」

タクミ「おれは出雲神社を継ぐぜ。それにもうすぐ式神と契約するつもりだからな。」

ソラ「え！もうかよ・・・」

タクミ「おまえはしないのか？」

ソラ「母さんが「まだ早い！」とか言ってぜんぜん許可くれないいんだよ。」

タクミ「なんだよ、まあ天流にはいろいろ有るんだろう。」

ソラ「そうなのかな～まあ、しばらくは闘神符（とうじんふ）の練習だな。」

タクミ「まあ、お前のお袋もいつか許可くれるって！」

そうだといいけどな。

そして授業が終わりタクミと校門までいっしょに歩いていた。

タクミ「俺はバスだからこっちだ。じゃあな！」

ソラ「おう、じゃあな。」

しばらく歩いていると前にあのなかよし3人組が見えてきた。

ソラ「お～い3人ともこれからどっか行くのか。」

なのは「あ！ソラ君、うん、これからみんなで塾に行くんだ。」

ソラ「そっか、頑張れよ。・・・おっと俺はこっちだ、3人ともまた明日な。」

3人「「「バイバイ！」」」

あの角を曲がれば家が見える所まで来たところでいきなり

【たすけて！】

なんだ！今の声！どこから？！

PPPPPPP！

するとメールが来た、差出人母さんからだ。

〜ごめ～ん、なんだか変な気配を感じるから。今夜は帰れません。だからご飯は自分で買って食べといてね～。　PS・ちなみに代金は立て替えませんのであしからず。〜

ソラ「変な気配か、あの声と何か関係あるのかな？」

さっき、聞こえた声と関係が有るのか考えてみたけど、まったくわ

からなかったから考えるのをやめた。

しょうがない、晩飯の件だが、ちょうどここハッピーチェーンの”牛丼・特盛りサービス券”があるのでまったく問題ない。

俺はその足で俺はそのまま牛丼を買うために牛丼屋に向かったのだった。

ちなみにそのサービス券は期限切れだったため使えなかった、よって俺の財布と心にダメージを受けたのは言うまでもなかった。

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0473t/

魔法少女リリカルなのは　闘神士と魔法少女

2011年10月9日01時32分発行